

## 『道命阿闍梨集』注釈(一)

柏 木 由 夫

### 凡 例

一、本稿は、冷泉家時雨亭叢書『承空本私家集中』に影印された『道命阿闍梨集』を底本として、注釈を試みたものである。

二、本文について、漢字と仮名の区別は底本のままとしたが、読解の便を考慮して次の処置を施した。

○底本の片仮名表記を、平仮名表記とした。

○仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一し、底本の表記と異なる場合は、原表記を括弧内ルビで示した。

○濁点を補い、詞書には必要に応じて読点を施した。

○底本本文に何らかの問題があつて解釈に支障がある場合は、他の諸本で修正し、原表記等を括弧内ルビで示し、【語釈】欄で説明した。

三、各歌には『新編国歌大観』番号を付した。

四、注釈には、【校異】、【他文献】、【現代語訳】、【語釈】、【評】の項目を立てて記した。

五、【校異】は宮内庁書陵部蔵『道命阿闍梨集』(501・176)〈略号、書<sub>1</sub>〉、同(501・710)〈略号、書<sub>2</sub>〉と、谷山茂氏旧蔵

『道命阿闍梨集』注釈

京都女子大学本『道命法師集』(090・Ta88・487)〈略号、谷〉の異文を、仮名遣いや送り仮名などのような解釈に影響しないと思われるものを除いて、底本本文とともに原態本文で示した。

六、【他文献】は、当該歌が勅撰集・私撰集・他の私家集などに入っている場合に、その所在と校異を示した。

七、【現代語訳】は、本文の各語に即しつつ、簡潔さと解りやすさに留意した。

八、【語釈】は、説明が必要と思われる語について述べた。特に当該歌までの和歌史的な伝統との関係を重視した。

九、【評】は、当該歌について【現代語訳】や【語釈】で尽くせない面を補足した。

十、引用和歌資料は特に断りがない限り、すべて『新編国歌大観』に拠った。

こむといひてこぬ人に、春たつ日  
1 いまこむといひし人だに見えなくにおもひのほかにきたるはるか  
な

【校異】 ○人たに□えなくに―人たに見えなくに（書<sub>1</sub>・書<sub>2</sub>・谷）

【他文献】 なし

【現代語訳】 来ましようと言つて来ない人に、立春の日に送った歌  
今にも来ましようと言つた人すら姿も見えないのに、期待していたの  
でもないのにやつて来た春だよ。

【語釈】

○こむといひてこぬ人に―訪れを期待させておいて約束を反古にした  
相手にそれをなじる歌を送る例は多い。

をとこのもとより、花ざかりにこむといひて、こざりければ

（後撰集・恋六・一〇四八）

大納言公任、花の盛りに来むといひておとづればべらざりければ

（後拾遺集・春上・一二七・具平親王）

来むといひつつ来ざりける人のもとに月のあかりければつかは  
しける（同・雑一・八六二・小弁）

○いまこむといひし―詞書の状況をなぞる表現。

いまこむといひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな

（古今集・恋四・六九一・素性法師）

人の婿の、今まうでこむといひてまかりにけるが、…ひさし  
うまうでこざりければ…

いまこむといひしばかりを命にて待つに消ぬべしさくさめのとじ

（後撰集・雑四・一二五九・女のはは）

○人だに見えなくに―底本の脱字「見」を諸本で補入した。「きたる春」  
と対照をなし、合わせて一首の骨格になっている。

年経ればありし人だに見えなくにつらき心はなほや残れる

（一条摂政御集・二四）

○おもひのほかにきたるはるか―「おもひのほか」は予想外の意で、  
「こむ」と言つた人の訪れを強く期待していることと対照させた。そ  
のため春を擬人化する。次の兼盛詠を踏まえるか。兼盛詠では来る  
のが人である点で異なる。「きたる春かな」は道命集・一〇九にも有  
るが、義懷詠にも見える。

我が宿の梅の立ち枝や見えつらんおもひのほかに君が来ませる

（拾遺集・春・一五・兼盛）

法師になりて住み侍りける所に桜のさきて侍りけるを見て  
見し人も忘れのみゆくふるさとに心ながくもきたる春かな

（後拾遺集・雑三・一〇三四・義懷）

【評】 すぐにも訪れると期待させて果されぬままに時が過ぎ、立春になつ  
た。期待外れだった人への不満を春の到来への喜びと対照させて訴え  
ている。後拾遺集の義懷詠は、寛和二年（九八六）花山天皇出家に続  
いて出家した後の詠で、栄華物語（巻第三 様々のよろこび）にもあ  
り、第三句を「山里に」とし、宝物集にも第二・三句を「とはずなり  
ゆく山里に」として入っている。道命詠と第五句が一致するだけでな  
く、人と春を対比的に扱うという一首全体の内容が極めて近く、しか  
も両者が花山院に親近した者であることも加えて考えると詠作上の関  
りをも推測される。

あひかたらふ人に

2 わればかりあひおもふことはかたくとも思ふ人をばおもひしらな  
ん

【校異】 ○思ふ人をは―おもふと、は、（谷）

【他文献】 なし

【現代語訳】 親しく付き合っている人に送った歌

私ほどにあなたが私を思ってくれることは難しいとしても、あなたを

思っている私のことを分かつてほしいのです。

【語釈】

○あひかたらふ―互いに言葉を交わすことが原義。特に親しい友人や恋人との間に使う。

思ひわびて、ねむごろにあひ語らひける友達のもとに…

(伊勢物語・十六段)

忍びて御匣殿の別当にあひ語らふと聞きて、父の左大臣の制し侍りければ

(後撰集・恋五・九六一・敦忠)

女をあひかたらひけるころ、…かの女のもとへつかはしける

(詞花集・恋上・二〇一・兼盛)

○わればかり―私があなたを大事に思っているのと同じぐらい。

我ばかり我を思はむ人もがなさてもや憂きと世をこころみん

(拾遺集・恋五・九九五・読人不知)

○あひおもふ―互いに思い合う。

我がごとくあひおもふ人のなき時は深き心もかひなかりけり

(後撰集・恋一・五二一・読人不知)

あひおもふ事こそ人のかたからめ我が思ふ事を知るとだに言へ

(定頼集・一四〇)

○かたくとも―前に困難なことを挙げ、それは無理と諦めつつ、最低限の望みとして歌末に願望「なむ」を示すことが定形。↓三七

春暮れて残らんことはかたくとも見るをりにだに花の散らなむ

(道濟集・一二八)

会ふことはさもこそ人目かたからめ心ばかりはとけて見えなむ

(後拾遺集・恋一・六三三・道命)

○思ふ人をばおもひしらなん―せめて私があなを恋している事だけでも知ってほしいと訴える。一首の眼目。次の後撰集歌は、自分の思う相手が自分を思わず他の人を思っていることをやめ、自分の思いを知ってほしいとし、道命歌に発想が近い。

思ふ人侍りける女に物のたうびけれど、つれなかりければつ

かはしける

思ふ人おもはぬ人の思ふ人おもはざらん思ひしるべく

(後撰集・恋一・五七一・読人不知)

【評】「かたらふ」は親密であれば同性の友人の仲でも用いるが、表現が類似する参考歌や道命歌の内容からはほとんど片思いの恋の歌と思われる。後撰集・五七一は、語釈での解の他に、別に恋人がいる女に、その恋人が女を思わないことを望み、そうなれば作者が恋しく思う心を女がわかるだろうとの解もあり得る。いずれでも「(女を) 思ふ人(である私を女が) 思ひ知る」というところが道命歌に重なる。しかし、歌の内容全体では定頼歌が最も近似している。両者は道命集・一〇六にもあるように面識のある間柄で、二人の年令差からすれば、定頼が道命歌に影響された可能性がある。

としはこえて、春はまだこぬに、人のもとに

3 としはこえはるはまだこぬ山里のそのつれづれをおもひやれきみ

【校異】 なし

【他文獻】 なし

【現代語訳】 新年になって春はまだ来ないので、人のもとに送った新年は山を越えてやって来たのに、春はまだ来ない山里の一人寂しく過ぐす私を思いやって下さい、あなたよ。

【語釈】

○としはこえて春はまだこぬに―立春が元旦より後に来る年であるため、新年になったが立春にまだならない時期(道命集・五二のように、霞が立つなどの春らしさがまだない、とも解せる)。歌詞に殆ど変わらず、歌詞に合わせて作ったか、または歌詞が日常散文的か。○としはこえはるはまだこぬ―とし「春」は擬人化されている。新年の到来を旅人が山を越えて訪れるように表現した。

春霞立てるを見ればあらたまの年は山よりこゆるものなり

〔拾遺集・春・二・文幹〕

あらたまのとしはきのふにこえにしをたちおくれたる春がすみかな

〔道命集・五二〕

○山里―道命の居所。道命集中の和歌に六首、詞書に七首（二首は和歌と重出）ある。別に「山寺に侍りしころ」（二六）のように詞書に「山寺」を含むものが一六首ある。道命は藤原師輔息で天台座主となつた尋禪を師として比叡山延暦寺の妙香院を修行の出發とし、後に嵐山の法輪寺や天王寺に住んだことがわかつている。「山里」や「山寺」はこれらのいずれかに当たるか。二六の語釈参照。

○つれづれをおもひやれきみ―「つれづれ」は、新撰字鏡に「独單也。比止利、又豆礼々々」とある。変化のない状態が続く中に一人いて、心が満たされないでいること。ここでは、一人でいる山里の厳しい冬の寂しさが、温暖な春によって和らげられることを期待しているながら、いまだ到来せず心が慰められないでいる状態。「きみ」は都の人で、「つれづれ」を訴えて訪れを望んでいると考えられる。

おもひやれ霞こめたる山里の花待つほどの春のつれづれ

〔後拾遺集・春上・六六・上東門院中将、經衡集・五三〕

おもひやれとふ人もなき山里のかけひの水のころぼそさを

〔同・雜三・一〇四〇・同〕

【評】道命集で春を「つれづれ」というのはほかに一〇九・二四〇に見える。いずれも一人でいる寂しさから人を求める思いが表されている。

ゆきのふる日

4 あはゆきのふるにつけても世の中のしら／＼しくもなりまさるかな

【校異】 ○なりまさるかな―なりにけるかな（谷）

【他文献】 なし

【現代語訳】 雪が降る日

淡雪が降ることでは白一色になってきたが、私は年を取るに従い、この俗世が興味を持たないものになってきたことよ。

【語釈】

○あはゆき―万葉集では「沫雪（あわゆき）」と表記され、十卷本和名抄でも「阿和由岐 其弱如水沫故沫雪也」とあり、泡のような雪の意だが、平安時代以後は「あはゆき」と表記され、「淡雪」（春先に降る消えやすい雪）とされる。

沫雪の消ぬべきものをいままでに長らへぬるは妹に会はむとぞ

〔万葉集・一六六六・大伴田村大娘〕

女を語らひ侍りけるが、年ごろになり侍りけれど、うとく侍りければ、雪の降り侍りけるに

降るほどもはかなく見ゆるあは雪の羨しくもうち解くるかな

〔拾遺集・冬・二四四・元輔〕

世の中はかなくのみおぼゆるころ

世の中にふるぞはかなきあは雪のかつは消えぬるものと知る知る

〔高光集・五〕

○ふるにつけても―「降る」と「旧る」を掛け、淡雪の降る情景に我が身が人生を過ごして来たことを重ねている。

春雨の降るにつけつつ糞虫の付ける枝をば誰か折りつる

〔兼輔集・二三〕

春雨の降るにつけてぞ世の中の憂きもあはれと思ひ知らるる

〔和泉式部集・四四四〕

あは雪の降るにつけても嘆くらん解くるをわびし人の心は

〔顯綱集・一六〕

○しら／＼しくも―一面の雪の白さに興ざめであることを掛ける。

しらしらしらけたる年月影に雪かきわけて梅の花をる

〔和漢朗詠集・白・八〇四〕

九条の右大臣、むすめかくれたまひて

よそに降る物とこそ見め白雪のしらじらしくも思ほゆるかな

(重之集・九五)

【評】 淡雪が降るのを見つつ、その表現に寄せて遁世の思いの深まりを歌う。淡雪は多く消えやすさが詠まれるが、その白さも

梅が枝に鳴きてうつろふ鶯の羽根白妙に沫雪ぞ降る

(万葉集卷十・一八四四、古今六帖第一・一八)

のように詠まれている。

もみちをみて

5 みにきたるかひこそなけれからにしききながらかぜにあてじとおもへば

【校異】 なし

【他文献】 なし

【現代語訳】 紅葉を見て

見に来て、身に着た甲斐がまるでないよ、紅葉の唐錦の衣は。やって来て衣として着ながら、紅葉の葉は木に付いたままで、散らす風に当たらないようにと思うので。

【語釈】

○みにきたる―「見に来たる」と「身に着たる」を掛ける。

紅葉葉を尋ぬる旅にあらねども錦をのみぞみにきつるかな

(続詞花集・戯笑・九六五・江侍従)

さは山の嵐ぞいとどぬがせつる紅葉の錦みにきたれども

(康資王母集・六四)

○かひこそなけれ―風に散って衣に付いた紅葉は唐錦のように美しいが、新たに下句に述べる気持ちになつたので甲斐がないと言った。

下句の「…おもへば」と結び付いた定形。↓一二七、二七八

『道命阿闍梨集』注釈

神無月しぐれわたれば山里の紅葉の錦着たるかひあり

(経信集・一五一)

八重咲けるかひこそなけれ山吹の散らば一重もあらじと思へば

(詞花集・春・四六・読人不知)

○からにしき―唐織りの錦。錦は数種の色糸で地に文様を織り出したもの。紅色の鮮やかさから、紅葉を譬えている。

網代木に掛けつつ洗ふ唐錦日を経て寄する紅葉なりけり

(拾遺集・冬・二二六・読人不知)

○きながら―「木ながら」に「来ながら」と「着ながら」を掛ける。

「…ながら」は、「…ままで」。「着ながら」の例と、「木ながら」に

「来ながら」を掛けた例を掲げる。

八乙女の小忌の衣をきながらに慣れぬほどをば誰か偲ばむ

(伊勢集・一〇八)

きながらぞ取るべかりける桜花折る間に多く散りにけるかな

(忠見集・九九)

散らさじと惜しみおきける言の葉をきながらだにぞ今朝は問はまし

(蜻蛉日記・上巻)

○かぜにあてじ―風で散らされないことを望む。大切なものを保護しようとするときにも使う表現。

立ち寄りてまづ我折らむ女郎花荒き風にもあてじと思ふを

(清慎公集・五八)

風にだにあてじとこそは思ひしか吹くにさはらで行くが悲しき

(赤染衛門集・六〇七)

【評】 紅葉を錦に譬え、それを衣として着ると詠むことは、

紅葉葉を分けつつ行けば錦着て家に帰ると人を見るらん

(後撰集・秋下・四〇四・読人不知)

などあるが、最も有名なものは、大鏡に「三舟の才」として説話化されている公任の

あさまだき嵐の山も寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき

だろう。これは公任集には「法輪寺に詣で給ふ時、嵐山にて」(一三九)としてもあり、道命が法輪寺に在住していたことからすれば、次の六に同じく二人の関わりの深さを示していると考えられる。三保サト子氏は「法輪寺の道命阿闍梨」(「島根女子短期大学紀要」第二六号、昭和六十三年)において、六とともに公任詠と同時のものかとし、「時は晩秋、嵐山は目にしみるばかりの全山紅葉に染めあげられている。公任の歌がまず詠み出され、道命が④(五〈筆者注〉)⑤(六〈同上〉)でもって唱和する」と述べられている。「きながら」が「木ながら」の意を持つ例に、道命の祖母である道綱母の作があるのは注意される。

おなじ事なめり

6 をぐら山あらしのかぜもさむからしもみちのにしき身にしきたれば

【校異】 ○さむからしーさむからん(書<sup>2</sup>)・さむからす(谷)

【他文献】 なし

【現代語訳】 同じことのようにだ

小倉山では嵐山から吹く強い風も寒くはないだろう。紅葉の錦を見に来て、衣として身に着ているので。

【語釈】

○おなじ事なめり―五の詞書「もみぢをみて」と同じ、とのこと。「めり」とするのは、自撰歌集とすれば記憶が定かでないためか。

○をぐら山―小倉山。京都市右京区嵯峨の大井川東岸にある。和歌では多く「小暗し」を掛け、鹿・紅葉を景物とする。道命集には他に七首で詠まれている。

○あらしのかぜ―木の葉を散らす寒い風と詠まれる。ここでは、「あらし」に大井川を隔てて小倉山と対岸に位置する嵐山を込める。道命

は嵐山麓の法輪寺に在住していた。

逢坂の嵐の風は寒けれどゆくへ知らねばわびつつぞ寝る

(古今集・雑下・九八八・読人不知)

人心嵐の風の寒ければ木の芽も見えず枝ぞしをるる

(後撰集・雑四・一二八二・伊勢)

○もみぢのにしき―中国の詩では花を錦に譬えることが一般。紅葉については日本的なもので、古くは上代からあり、寛平期に急速に広まったとされる。(鈴木宏子「へもみちと錦の見立て」の周辺)『古典和歌論叢』犬養廉編 明治書院 昭和六三年四月刊)

天紙風筆雲鶴を画き、山機霜杼葉錦を織らむ

(懷風藻・六・大津皇子)

経もなく緯も定めず娘子らが織るもみぢ葉に霜な降りそね

(万葉集・一五二二・大津皇子)

霜のたて露のぬきこそ弱からし山の錦の織ればかつ散る

(古今集・秋下・二九一・関雄)

このたびは幣もととりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに

(古今集・羈旅・四二〇・道真)

○身にしきたれば―「し」は強めの副助詞。「見に来たれば」と、嵐の風も寒くはないという理由を述べた「身に着たれば」を掛ける。

【評】 五の評で掲げた公任歌は内容面で極めて近似するが、同様に次の定頼集歌は下句が完全に一致する。

今日よりは衣の袖もほしからず紅葉の錦身にし着たれば(八七)

名に高き峰の嵐は寒からじ紅葉の錦身にし着たれば

(二八五、一八九に重出)

ふぢごろも薄墨色もほしからず紅葉の錦身にし着たれば

(明王院本 四〇八)

このうち「名に高き」は、公任が長谷隠棲時定頼の贈歌に答えたもので、公任集(一四六)にも小異があるが―第二句「岡のあらしは」第五句「みにしきたらば」―入っている。公任の長谷隠棲は万寿二年(一

○(二五) 年末のことで、道命の死後の歌とわかる。他の詠作年次はわからないので、道命詠を含めた先後関係は不明だが、公任・定頼父子と道命の関わり深さは推測される。(柏木由夫「藤原定頼年譜考」その前半生について)『平安時代の和歌と物語』鈴木一雄編 桜楓社 昭和五十六年、『平安時代後期和歌論』所収 風間書房 平成(一二年)

人にまた

7 おぼろけのいろとや人のおもふらんをぐらの山をてらすもみぢば

【校異】 なし

【他文献】 千載集・秋下・三五六「題しらず」、歌枕名寄卷二・七二

四

【現代語訳】 人にまた送った歌

並一通りで、ぼんやりした色だとあなたは思うのでしょうか。小暗いとされる小倉の山を照らす美しい紅葉葉を。

【語釈】

○おぼろけ―ぼんやり霞んだ様。並一通りな様。ここは両意を掛け、前者は「をぐら(小暗)」の縁語。月の形容を介して、価値の低いものとして、否定的に表現されることが多い。

逢ふことは片割れ月の雲隠れおぼろけにやは人の恋しき

(拾遺集・恋三・七八四・読人不知)

ゆふしでや繁き木の間を漏る月のおぼろけならで見えし影かは

(後拾遺集・雑五・一一一・六条院宣旨)

○をぐらの山―紅葉の名所。「小暗し」を掛け、紅葉を「おぼろけの色」と評する根拠になっている。

紅葉せば赤くなりなん小倉山秋待つほどの名にこそありけり

(拾遺集・夏・一三五・読人不知、後拾遺集・夏・一三三・能宣)

○てらすもみぢば―実際には、「小暗」は名ばかりで、紅葉は一際色鮮

やかに明るい。

大井川せきの紅葉に照らされて小倉の山もなきかと思ふ

(小大君集・一五九)

【評】 小倉の山の名に寄り掛かり、紅葉の美しさを言う歌。上条彰次氏は「なお、家集では、恋の寓意歌か」(『和泉古典叢書』8 千載和歌集「補注」とする。恋の思いの強さを訴えたと解する)か。

もみぢしたるきのもとに

8 もみぢばのはしたなきまでちりしきてかせさへあかむこ、ちこそすれ

【校異】 ○かせさへあかむ―かをさへあかむ(谷)

【他文献】 なし

【現代語訳】 紅葉した木の下で詠んだ歌

紅葉した葉がいつぱいに散り敷いて、紅葉だけでなく、それを吹く風までもが赤く色付く気持ちができるよ。

【語釈】

○はしたなきまで―程度が甚だしいことを表す。「はしたなし」には、見苦しい、無情だ、の意もあり、そうしたニュアンスもあるか。

秋風のふけゆく野辺の虫の音にはしたなきまで濡るる袖かな

(山家集・四四八)

○ちりしきて―紅葉が地面に散り重なっている状態。

紅葉葉の散り敷く時は行き通ふ跡だに見えぬ山路なりけり

(貫之集・八六)

紅葉葉ぞちりしきにける柚山の谷のかけ橋くれなるに見ゆ

(為忠初度百首・橋上落葉・四五一・忠成)

○あかむ―赤くなる。赤みを帯びる。同時代和歌での用例は見えない。唐の紙の赤みたるに草にて…(枕草子・清水にこもりたるに)

情けにはゑはぬものからさしいづれば顔あかみても恥づかしきかな  
(風情集・六一六)

この秋は時雨もいたく染めてけりあかみの山の峰の紅葉葉

(時朝集・二〇五)

【評】 散り敷いた紅葉の鮮やかさを歌うが、第二句・第四句は道命好みの日常的口頭表現か。しかし、風が色付くという表現には、次に掲げる中世和歌の発想を先取りする感受性も見られるように思われる。

散り紛ふ花を雪かと見るまでに風さへ白し春の曙

(千五百番歌合・二百十番・左・四一九・顕昭)

宮城野のもとあらの小萩うつるより風さへ色に出でにけるかな

(為家千首・秋二百首・三二六)

大井河のつらにて月をみる

9 月かげのあせきに月もとまらばこ、をかつらといはましものを

【校異】 ○つら—もと(谷)、○あせきに月も—ぬせいにたにも(谷)

【他文献】 なし

【現代語訳】 大井河の川辺で月をみる

月光に照らされた井堰に月もせき止められてとどまるならば、ここを桂と言いたいだけだ。

【語釈】

○大井河—京都府北桑田郡の大悲山を源流とし、亀岡から愛宕山を巡って嵐山に至るまでを保津川と言い、渡月橋から桂橋まで(松尾橋までとも)を大井川と言う。その後淀川に合流するが、そこまでを桂川と言う。丹波からの木材輸送の便だった。大堰が設けられたことが命名の由来。歴代天皇の行幸があり、紅葉の名所として多くの和歌に詠まれている。

色々の木の葉流るる大井河しもは桂の紅葉とやみむ

(拾遺集・秋・二二二・忠岑)  
大井河うつれる月も見えぬまで浮かびにけりな山の紅葉葉  
(頼宗集・二五)

○つら—ほとり。そば。「和泉の国にまかりけるに、海のつらにて」(後撰集・春下・一一一) ↓ 一三

○あせき—川の水を杭や石組でせき止めた場所。水が漏れる、または越える、紅葉は止まるとされる。

名のみして成れるも見えず梅津河あせきに水も漏ればなりけり

(拾遺集・五四八・読人不知)

大井河あせきに越えて行く水のたえずも物を思ふころかな

(古今六帖第三・あせき・一六二三)

とどむれどとどめかねつも大井河あせきを越えて行く水のごと

(躬恒集・一二〇)

落ち積もる紅葉を見れば大井河あせきに秋も止まるなりけり

(後拾遺集・冬・三七七・公任)

○こ、をかつらといはましものを—桂は京都市西京区。渡月橋の下流にある桂橋のあたりの大井河(桂川) 西岸の地。万葉集からすでに受容されている月の中には桂の木が生えているという中国の伝説に基づいて、大井河の川面に月がとどまるなら桂の木もあるはずなので、桂の地と言おうと連想した。 ↓ 一一〇

久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればや照りまさるらむ

(古今集・秋上・一九四・忠岑)

大井にて、舟にのりて歌よむに、題あり

月影のかよひてすめる大井河このわたりをや桂と言ふらん

(明王院本定頼集・七〇、栄華物語巻第一九・御裳着 初句・第二句「月の出づる峰をうつせる」)

水の上に浮かべる舟の君ならばここぞとまりと言はましものを

(古今集・雑上・九二〇・伊勢)

【評】 定頼詠は治安三年(一〇二三)の作と考えられるので、道命詠が



先行する。(柏木由夫『藤原定頼年譜考』その後半生について(上)―  
「大妻国文」平成五年三月、『平安時代後期和歌論』所収 風間書房  
平成二二年)「月の桂」の趣向を地名に結び付けることに興じた歌。

法輪にありしころ、花を<sup>⑪</sup>をりて人に

10 おぼろけかあらしの山にさく花をひとえだにてもみするこゝろを

【校異】 ○法輪にありし―ほりなりし(谷)、○見するこゝろを―み

するこゝろは(谷)

【他文献】 なし

【現代語訳】 法輪寺に住んでいた頃、花を折って人に送るのに添えた

歌

いかげんではありませんよ、この風の吹く嵐山に咲く花を一枝でも  
あなたに見せる心なのに。

【語釈】

○法輪―法輪寺。京都市西京区嵐山虚空藏山町。智福山。真言宗御室  
派。寺伝では和銅六年(七一三)元明天皇の勅願による行基創建と  
する。源平盛衰記では天平年間(七二九―七四九)建立、天長六年  
(八二九)空海の弟子の道昌僧都が本尊の虚空蔵菩薩を刻んで安置し、  
寺名を法輪寺とした。枕草子「寺は」で壺坂・笠置と並んで挙げら  
れ、道命集のほかに、重之子僧集・和泉式部集・公任集・赤染衛門  
集・道済集などに見える。三保サト子氏は「道命は凡そ長徳から長  
保にかけての頃、縁あつて法輪寺に住房をもつことになったらしい」  
(前掲「法輪寺の道命阿闍梨」とするが、それは晩年に及ぶものだっ  
たか。

道命阿闍梨なくなつてのち、法輪に詣でたりしに、住みし坊  
の桜の咲きたりしを見て

誰見よとなほ匂ふらん桜花散るを惜しみし人もなき世に

【道命阿闍梨集】注釈

(赤染衛門集・五八一、玉葉集・雜四・二三九五)  
○おぼろけか―「おぼろけ」は、並一通り。「か」は反語。他に例のな  
い句。

○あらしの山―嵐山。大井川(保津川)に掛かる渡月橋付近の西方の  
山。法輪寺のある松尾山は南東に連なる。地名を根拠に花を吹き散  
らす嵐が吹く山とした。紅葉の名所で、平安時代、道命のころまで  
花を詠む例は他に見えず、桜の名所となるのは後嵯峨上皇時代から  
とされる。

散り紛ふ嵐の山の紅葉ゆゑ心つくさぬ時のなきかな

(小大君集・一六〇)

ことわりやあらしの山に咲く花は心のどかに匂はざるらん

(久安百首・一三・崇徳院)

山高み常に嵐の吹く里は匂ひもあへず花ぞ散りける

(古今集・物名・四四六・紀利貞)

○ひとえだにても―強い嵐でほとんど吹き散らされ、わづかに残るも  
のだけでも、の意。↓二一、一六八、一七〇

都人いかがと問はば見せもせむこの山桜ひと枝もがな

(後拾遺集・春上・一〇〇・和泉式部)

ひと枝は折りて帰らむ山桜風にのみやは散らしはつべき

(千載集・春下・九四・源有房)

○みするこゝろを―「を」は文末におく問投助詞と考える。「…かなあ。」  
「…なのになあ。」谷山本文なら初句に続く倒置。

【評】地名の嵐山に強風の嵐を掛けることは珍しくないが、嵐山の花を  
詠むことはこの時代ではユニーク。住んでいる者ならではの詠。

月をみて

11 月をのみよろづにつけてながむればいまはめなれてなぐさめか  
な

【校異】 なし

【他文献】 なし

【現代語訳】 月を見て詠んだ歌

月ばかりを何事に付けてもほんやりと見入ってしまうので、今では見慣れてしまい、心が慰められないことよ。

【語釈】

○よろづにつけて―心が波立つごとすべてに。慰めを求めているのだから、不安・恐れ・失望・悲しみ・苦しみなどの負の感情にとらわれたときはいつでも、との意。

憂しと思ふ我身に秋にあらねどもよろづにつけて物ぞ悲しき

(和泉式部集・四二)

いつまでか声も聞こえぬ山彦のよろづにつけて物ぞ悲しき

(赤染衛門集・四六一)

○ながむれば―「ながむ」は物思いにとらわれつつほんやりと見ること。月に対しての例は多い。

世に経るに物思ふとしもなければも月にいくたびながめしつらん

(拾遺集・雑上・四三一・具平親王)

○いまはめなれて―眺めることが度重なつて新鮮味がなくなっている状態。

神無月いまはめなれて告げずともしぐるるだにも空にしらん

(赤染衛門集・二六・他人歌)

○なぐさまぬかな―月を見る人の心を慰めるものとの前提があつて、なおそれでも慰められないとも詠まれる。

我が心慰めかねつ更級やをばすて山にてる月を見て

(古今集・雑上・八七八・読人不知)

慰むと誰か言ひけむながむれば月こそ物は悲しかりけれ

(長秋詠藻・一五一)

【評】 月は仏教上で格別な意義を持つが、ここではそうしたことは特に

表立てることなく、「いまはめなれ」てしまったため慰めを求めても得られないという実感を率直に詠んだもの。しいて言えば、月に日常格別関心を持って生活していることが出家者らしいと言えようか。

くまのへまうで、みちに月をみて

12 はるぐとめのゆくかぎりながむれどあくよもなきは山のはの月

【校異】 ○まうて、―まで、(谷)、○なかむれと―なかむれは(谷)、

○あくよもなきは―あくよ・もなきは(書)

【他文献】 なし

【現代語訳】 熊野に参詣に出掛けて、道中で月を見て詠んだ歌

はるか彼方へと目のとどく限り見詰めるが、見飽きる夜がないのは西の山の稜線にかかった月だよ。

【語釈】

○くまの―和歌山県にある熊野本宮大社・熊野速玉大社(新宮)・熊野那智大社の熊野三山。熊野は日本書紀に伊弉冉尊(いざなみのみこと)の葬地とされ、他界への入り口と考えられた。平安初期に仏教化し、浄土信仰の流布を背景に熊野詣でが盛んになった。僧俗貴賤の参詣が行われ、御幸も延喜七年(九〇七)の宇多院に始まり、正暦二年(九九二)の花山院を経て、白河院以下の院政期に最高潮になった。道命に近い時期の私家集では、増基法師集(いほぬし)に熊野紀行の歌文があるほか、山田法師集・重之子僧集・能因法師集などでも熊野詣での和歌が見える。↓八一〜九三、二九〇〜二九三。

熊野に参りて月を見て

都にてながめし月のもろともに旅の空にも出でにけるかな

(玄々集・二二六・道命)

熊野へ参る道にて月を見て詠める

山の端にさはるかこそ思ひしか峰にてもなほ月ぞ待たるる

(後拾遺集・五〇五・少輔)

○はるく／＼とめのゆくかぎり——ここでは、遠く肉眼で届く限り月の沈んで行く先までも、の意。「めのゆくかぎり」は他に類例なく、道命らしい平易な表現。

はるばると山の端過ぎて行く月と過ぎ行く秋といづれまされり

(忠岑集・一二四)

○あくよもなきは——以下の例から「山のはの月」は『玄々集』や『後拾遺集』の熊野での月の和歌と異なり、西に沈んで行く月であり、「飽く…なき」とするのは沈むまで見詰めて来た時間の長さとの心の集中を暗示していると知られる。

飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあらなむ

(古今集・雑上・八八四・業平)

をちに見し山のこなたに見るときも月には飽かん夜もなかりけり

(赤染衛門集・一四五)

○山のはの月——西の山の稜線に沈もうとする月。月は仏教上で言う「真如の月」(真理が人の迷妄を破ること。煩惱が解け去って現れて来る心の本体を月に例えた語)を表し、西方浄土に人を導くものでもある。

暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

(拾遺集・哀傷・一三四二・和泉式部)

宿毎に変はらぬものは山の端の月をながむる心なりけり

(前麗景殿女御歌合・五・月左・相模)

【評】道命の熊野詣での和歌は、八一以下及び二九〇以下の歌群と玄々集にも見られる。熊野には道命が私淑した花山院も詣でている。道命が院に従ったという明徴はないが注意される。和歌の内容は、月を愛で執着するもので、そうした発想は格別珍しくないが、上句の沈んで行く月の先までに及ぼうとする眺望感に新鮮味がある。それは熊野詣での途路の地形的状況と道命の現実感を反映し、前歌の都での日常性に対する旅中の心細さから、つり迫る月への思いによるとも考えら

れるが、同時に和泉式部詠と同じ仏教的觀念に支えられて月を憧れつつ見ていることにも因るのではないかと思われる。

正月、大井河のつらにて

13 はるはまたあきになるべし大井河そのみくづのいろもかはらず

【校異】 ○つら—もと(谷)

【他文献】 なし

【現代語訳】 正月に、大井河の岸辺で詠んだ歌

この川辺の春もまた、いずれ秋になり、木々は季節毎に色を変えるだろう。しかし、大井河の川底の水屑は常に色も変わらない。その水屑のように拙い私自身も変わる時なく華やぐことはない。

【語釈】

○大井河のつら——「つら」はひとり、川辺。↓九

○はるはまたあきになるべし——毎年の春と同じように今年の春も季節が深まり進んで、春から夏を経て秋になるはず。ここでは下句で示した、季節に関わらず変わらない川底の水屑に対比されていると思われる。それは大井河の川辺や川面の自然の変化を言うか。具体的には、「みくづのいろ」の不変への対照として、季節による木々の葉の色の変化であって、春や夏の緑、秋の紅葉を考えているか。

春はまた浅緑なる野辺の色も降りそむる雨に濃くやなるらむ

(大斎院前御集・二二七)

落ち積もる紅葉を見れば大井河るせきに秋もとまるなりけり

(後拾遺集・冬・三七七・公任)

○そのみくづ——「みくづ」は水中のごみ。汚れた物で、人の注目に値しない物とされる。我身を寓することも多い。順・好忠の他に恵慶・能因が詠んでいる。

なみだがは底の水屑となり果てて恋しき瀬々に流れこそすれ

〔拾遺集・恋四・八七七・源順〕

宇治川の底の水屑となりながらなほ雲かかる山ぞ恋しき

〔金葉集・雜上・五九〇・忠快法師〕

【評】上句が茫漠とした表現で具体性がなかったため、作者の真意が確認出来ない。四季の変化とともに色付く周囲と無縁で変わることのない「このみくづ」に、世間から疎外されたままで変わらない我身を寓して卑下したと解した。

わかなを、ほうりんにて

14 わかなゆゑ野辺にもいで、こゝろからをぐらの山につまむとぞおもふ

【校異】 ○ほうりんにて―ほうりにて（谷）、○いて、―いてし（書<sub>2</sub>）

【他文献】 なし

【現代語訳】 若菜を、法輪寺で詠む

若さをもたらず若菜なので、寿命を延ばすために野辺にも出掛けて、心を込めて蔵とも見える小倉山に摘んで積もうとばかり思うよ。

【語釈】

○わかな―若菜摘み。春の初めに芽を出した野菜を摘むこと。冬季の雪間に不足した野菜の栄養を摂ろうとする民間習俗が年中行事化したもので、平安時代の儀式としては、子の日の供若菜、正月七日の人日（じんじつ）の七種の若菜の羹（あつもの）、十五日の七種粥に分かれると言う。（山中裕著『平安朝の年中行事』『塙選書』一年の邪氣払いと不老長寿を願う意味があった。和歌では正月の行事のほかに算賀の折でも詠まれた。ここで「わかなゆゑ」とするのも若さへの期待を表す。

正月七日、周防守みちむねのがり、言ひやり侍りし

老にいたる人をのべには誘はなん睦まほしき若菜と思ふに

かへし

若菜ゆゑ雪間を分けて今日はまた年の数つむ君をこそ待て

〔経衡集・一二五、一二六〕

○ほうりん―法輪寺。↓一〇、一六

○野辺にもいで、―「野辺」に「延べ」を掛ける。

引き連れて今日は子の日の松にまたいま千年をぞのべにいでつる

（後拾遺集・春上・二五・和泉式部）

○をぐらの山―小倉山。「くら（蔵）」を掛け、「つむ（積む）」と縁語。

春日すら小倉の山に降る雪はおほくの年を積みど消えつつ

（千穎集・一）

○つまむとぞおもふ―「つまむ」に「摘む」と「積む」を掛ける。

今年より若菜に添へて老いの世に嬉しきことをつまむとぞ思ふ

（後撰集・慶賀哀傷・一三七〇・藤原忠平）

君と我かたみにも世の春ごとに若菜も年もつまむとぞ思ふ

（高遠集・一二〇）

【評】早春の若菜摘みを居所近辺の小倉山に寄せて詠んだ。掛詞も長寿を祈る内容も伝統に則っている。小倉山の若菜摘みと言う点が独自。

かめ山を

15 大井河みづにうかべるかげゆゑやかめ山の名もよにながれけん

【校異】 ○かめ山を―かめ山（谷）、○かけゆ□や―かけゆへや（書<sub>1</sub>・書<sub>2</sub>・谷）、○名もよに―名のよに（谷）

【他文献】 なし

【現代語訳】 亀山を詠んだ歌

大井河では水面に浮かんだ影のせいで、亀山の評判も世の中に広がったのだろうか。

【語釈】

○かめ山―京都市右京区嵯峨。大井河を挟んで嵐山の北、小倉山の東南に位置する。天竜寺の後山。山の形が亀甲に似ていることからの称。亀にちなんで長寿の賀歌に詠まれる。↓二〇四

亀の尾の山の岩根をとめて落つる滝の白玉千代の数かも

(古今集・賀・三五〇・紀惟岳)

亀山の劫(かげ)〔西本願寺本〕を映して行く水に漕ぎ来る船はいく代経ぬらん  
(貫之集・一六四)

○みづにうかべるかげ―大井河の水面に映っている亀山。

手にむすぶ水に浮かべる月影のあるかなきかの世にこそありけれ

(拾遺抄・雑下・五七五・貫之)

○ゆゑや―底本の脱字「へ」を諸本で補入し、仮名遣いを改めた。

○かめ山の名もよにながれけん―「名」は評判。「世に流れる」とは世の中に広まり知られること。「かめ(亀)」「ながれ」が「河」「水」の縁語。大井河は堰で流れがせきとめられる所(↓九)なのに「ながれ」た、を含意とする。

大幣と名にこそ立てれ流れてもつひに寄る瀬はありてふものを

(古今集・恋四・七〇七・業平)

滝の糸は絶えて久しく成りぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ

(拾遺集・雑上・四四九・公任)

ほうりむに参りて詠み侍りける

年ごとにせくとはすれど大井河昔の名こそなほ流れけれ

(後拾遺集・雑四・一〇五九・道濟)

【評】亀山を長寿の賀歌としてではなく、名所として詠んだ点はユニーク。「名」と「流れる」を詠むことは、業平歌が早くにあるが、名所を詠むということからすると、公任歌の方法に学んで、その縁語の趣向を水に棲む亀に寄せて一層発展させたものと思われる。

ほうりんに侍けるころ、もみぢのしたりしを、人の御もとにたてまつりし

16 人もみぬをぐらの山のもみぢばやなだか、るよのにしきなるらん

【校異】

○ほうりんに侍けるころ―ほうりに侍ける(谷) ほうりんに侍るころ(書)、○もみぢの―紅葉のしたりけるを人のさふらふもとにたてまつれて(谷)、○なたか、るよの―なたか、なるよの(書) なた、る夜の(谷)

【他文献】

なし

【現代語訳】 法輪寺に居りましたころ、紅葉したものをある人のもとに差し上げて添えた歌

暗くて人も見えないという小倉山の紅葉の葉は、甲斐がないことで有名な夜の錦なのだろうか。

【語釈】

○ほうりん―法輪寺。↓一〇、一四

○もみぢのしたりし―四月ばかり、まゆみの紅葉のしたりけるを、見たまうて(定頼集・三九〇)

○人もみぬ―誰も気付いて見ない。小倉山の暗さのせいとする。

人も見ぬ宿に桜を植ゑたらば花もてやつす身とぞなりぬる

(後拾遺集・春上・一〇一・和泉式部)

○をぐらの山のもみぢば―小倉山は紅葉の名所。「暗」を掛ける。↓六、七

紅葉葉を今日はなほ見む暮れぬとも小倉の山の名にはさはらじ

(拾遺集・秋・一九五・能宣)

今日なれば小倉の山の紅葉葉は夜さへ照りて見えや渡らむ

(躬恒集・一三)

○なだか、る―名高かる。有名な。谷山本は「名立たる」で意は同じ。

○よのにしき―夜(よる)の錦。甲斐のないこと。無駄なこと。夜に錦を着ても目立たないことから言う。「富貴不帰故郷 如衣錦(繡)

夜行」(錦―漢書・項羽伝、蒙求和歌、繡―漢書・朱買臣伝、史記・項羽本紀、蒙求)に拠るとされる。

見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり

(古今集・秋下・二九七・貫之)

うき里の菊見る人もなき宿の紅葉や夜の錦なるらむ

(大斎院前の御集・一八六)

【評】自分の居る小倉山は暗くて紅葉しても見えないので、人は訪れず紅葉の甲斐がないと訴えた。古今集の貫之歌に拠り、知人の訪れなきを恨んだ。紅葉から「小倉山」と「夜の錦」を結び付けたことが趣向の歌。

絵に、身なげむとて、たかき岸にゐて、女のながめたるころにかきつく

17 ともかくもわが身ひとつはなしつべしのこらむ名こそうしろめたけれ

【校異】 なし

【他文獻】 新千載集・雑中・一八八九 詞書「絵に、女の身なげんと

するところにかきつけ侍りける」、万代集・雑六・三六四〇 詞書「絵に、女の身なげんとするところにかきつけける」

【現代語訳】 絵に、身を投げようと高い岸に腰を下ろして女が思い詰めて眺めている所に書き付けた歌

どのようにでも、私の身一つは投げて消えてしまおう。この世に残ることになる浮名だけが気掛かりなことよ。

【語釈】

○絵に、身なげむとて――大和物語の「生田川伝説」や源氏物語の浮舟、狭衣物語の飛鳥井姫君などのように登場する女が入水する物語絵巻の一場面か。風葉和歌集・恋四には物語中の入水場面での和歌

が集められている。「猿沢の池にうねべの身投げたるをみて」(拾遺集・哀傷・一二八九・人まろ)、「生田の海に身投げたる女の懸想人の二人ながら落ち入りたるを、人々詠みしに」(弁乳母集・七〇)。

心より外の船の中にて、身を限りに思ひなりにけるに、帝の、渡る舟人と書かせ給ひつる扇に書き付けける

梶を絶え命も絶ゆと知らせばや涙の海に沈む舟人

(風葉和歌集・恋四・一〇四五・あすかゐ)

同じ折、海に入りなんとて書き添へ侍りける

早き瀬の底の水屑になりにきと扇の風よ吹きも伝えよ

(同・同・一〇四六・同)

あはれと思ひける女の、あはづの涙のほとりにて身を投げにけりと聞きて、石山に詣で侍りけるに、うちいでるほど過ぐとて詠み侍りける

恋ひわびぬ我も渚に身を捨てて同じ藻屑と成りやしなまし

(同・同・一〇四七・あさくららの関白)

故中納言たよりについでに一夜とまりて、またもととひ侍らざりければ、身を投げんとしける所にて、鵜飼を見付けて袴の腰を引きやりて、簪の松の炭して書きて、かの中納言に伝えよとて取らせ侍りける

かつ消ゆるうき身の沫と成りぬとも誰かはとはん跡の白波

(同・同・一〇四八・かたの大領の女)

○ともかくも―どのようにでも。なんとでも。「言う」に続くことが多い。ここは以下と結び付いて、身投げすることを言う。

ともかくも言はばなべてになりぬべし音に泣きてこそ言はまほしけれ

(和泉式部集・一六二)

○わが身ひとつは―他は別にして、自分一人は。悲しみや辛さを表す場合が多い。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわがみひとつはもとの身にして

(古今集・恋五・七四七・業平)

○なしつべし―「…つべし」は「…するつもりだ」の意で、意志・決定を表す。↓九二

恋しきに身も投げつべし慰むることにしたがふ心ならねば

(興風集・五〇)

○のこらむ名こそうしろめたけれ―身投げをして体は消滅するが、死後に残る浮ついた評判が気掛かりだ、の意。ここでは上句の「身」に「名」が対照されている。「うしろめたし」は、自分が直接関与できないことについて気掛かりだ、心配だの意だが、和歌では花を散らす夜の風について用いることが多く(↓一〇二、二一九)、「名」は「惜し」と詠まれることが多い。

語らひ侍りける人の、あながちに申さすることのありければ  
言ひつかはしける

従へば身をば捨ててん心にもかなはでとまる名こそ惜しけれ

(金葉集・恋上・三九三・藤原有教母)

朝まだき起きてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに

(拾遺集・一二九・元良親王)

【評】道命集で絵に添えた和歌は、他に臨時祭の絵に添えた一一七と長恨歌の絵に添えた一四九(三一)に見える。ここでは身投げする女の気持ちになって、この世への絶望と執着が詠まれている。

人知れぬ恋には身にもえぞ投げぬとどまらん名をせめて惜しめば

(堀河百首・不被知人恋・一一五・紀伊)

世の中も浮名はとまるものなれば身を投げつとも甲斐やなからん

(続詞花集・恋上・六〇・藤原宗家)

つかさのぞむ人の、こと人になられてなげくとき、しに

18 さくら花色ものこらずひとすぢにおもひなきえそはるのあはゆき

【校異】 ○なられて―なされて(書)、○なけくと―なけくさ(谷)、

『道命阿闍梨集』注釈

○桜花―さく花の(谷)、○のこらす―おとらす(谷)をこらす(書)、○ひとすぢにおもひ―ひたすらにこゝろ(谷)

【他文献】 なし

【現代語訳】 官職を望む人が、別の人にその職になられて嘆いている

と聞いたので詠んだ歌

華やかな桜の花もいずれ散って色も残らないものだから、あなたも栄えある官職を得られないからといって、春の淡雪が消えるように、ひたすら落胆することはないですよ。

【語釈】

○つかさのぞむ―「つかさ」は官職。ここは地方官を決める春の県召しの除目に際してのこと。望んだ官職が得られずに悲しむ人々の様子は枕草子にも描かれているが、除目に関しての和歌も歌集類に多く見え、平安貴族にとつて大きな関心事だった。「つかさたまはらで嘆き侍りけるころ、人の冊子書かせ侍りける奥に書き付け侍りける」(拾遺集・雜上・四六三・貫之)、「司召しに漏りて嘆き侍りけるころ女のもとに遣しける」(後拾遺集・雜三・九八八・藤原基長)

○さくら花色ものこらず―桜の花は色も残らず消えてしまうことに、官職を得て華やかな身の上になっても、いずれ跡形もなくなるとの意を込めたか。

石の上ふるの山辺の桜花こそ見し花の色や残れる

(延喜十三年(九一三)亭子院歌合・七・季方)

○おもひなきえそはるのあはゆき―「春のあは雪」に官職を得られなかった人の心を譬え、悲しまぬようにと慰めた。「消え」は淡雪についてと同時に「思ひ消え」で意気消沈することを懸ける。

白雪の降りて積もれる山里は住む人さへや思ひ消ゆらむ

(古今集・冬・三二八・忠岑)

かつ消えて空に乱るるあは雪は物思ふ人の心なりけり

(後撰集・冬・四七九・藤原かげもと)

はかなくてうはの空にぞ消えぬべき風にただよふ春のあは雪

(源氏物語・若菜上・四六六・女三宮)

【評】詞書に対して和歌の内容が今一つ不明瞭。特に上句がわからない。あるいは本文に乱れがあるのかもしれない。ちなみに谷山本文を示すと、

さく花の色もおとらずひたすらにこゝろなきえそ春のあはゆきとあり、初句が「さく花に」ならば、「さく花」が官職を得た人の意で、「春のあはゆき」に譬えられる人が官職を今得られなかった人で、官職を得られないにしろ劣ることはないので悲しむなと慰めていることがはっきりする。

あるやむごとなき所よりおほせられたる

19 をりしもあれ花のさかりにゆきたらばさくらがりとやきみはおもはん

【校異】 ○おほせられたる―おほせらるゝ、(谷)、○をりしもあれ―

おりしもの(谷)、○ゆきたらは―ゆきたえは(谷)

【他文獻】 袖中抄 第三句「いきたらば」第五句「人はおもはん」

【現代語訳】 ある御身分の高い方からおっしゃられた歌

折も折、もし花の満開の時にお宅に出掛けたならば、花見に来たとあなたは思うでしょうか。

【語釈】

○やむごとなき所―高貴な身分の人。具体的には不明。↓二五八

○をりしもあれ―他の時もあるうに、よりによつてこの時を選んで。をりしもあれいかに契りて雁金の花の盛りに帰り初めけん

(後拾遺集・春上・七二・弁乳母)

○花のさかり―花が満開で美しさの頂点の時。

今来むと契りし人の同じくは花のさかりを過ぐさざらん

(後拾遺集・春上・八八・兼澄)

○さくらがり―現行辞典では、山野に尋ね歩いて桜を觀賞することとされるが、古くは諸説があった。

桜がり雨は降りきぬ同じくは濡るとも花の影に隠れむ

(拾遺集・春・五〇・読人不知)

二月ばかり三河の国の花園山といふ所にてかりし侍るとて春霞花園山を朝たてば桜がりとや人は見るらん

(統詞花集・雑上・七五四・読人不知)

さくらがりとはさくらをたづねもとむるなり。何を、とむるをばかと云ふ也。ししがり、たかりなどいふめり。(奥義抄)

…たゞものをこゝかしこにみありかなと云ふことばなれば、さくらがりと云ふ、ことばもこころもよき。(和歌童蒙抄)

…又フルクヨリサマノ義アリ ①或ハサトクラガルト云詞也

トイヒ 或ハサハ狭義也 チイサクスクナキ心ニテ タバスコシ

クラガル心歟 ②サクラノ許ヘフリクト云也 和泉式部哥云サキ

スラムサクラガリトテキツレドモ此コノモトノアルジダニナシ道

命阿闍梨哥 ヲリシマ(モア)レハナノサカリニ 此阿闍梨ノ心

ハサクラノモトヘトモイヒツベシ ③又サクラヲ狩トイフコ、ロ

ニモヨセタルニヤ 奥義抄の引用などあり 中ゴロノ人ノ哥ニモ

ハルガスミハナゾノヤマヲアサタテバ コレサトイフ詞ノ義ニ

アハズ狩トキコエタリ 私云カルトイフ義ハ此花蘭山ノ哥ヲ良暹

打聞ニ入タレバニヤ アマタ人申メリ(袖中抄)

『袖中抄』で、①は、少しくらがる、とし、②は、「がり」を「の」とへ」とする。③は「狩り」とし、奥義抄・和歌童蒙抄に同じく、

尋ね求めるとする。

【評】足が遠のいているのは、満開の花の時に行ったら、道命に会いたくて訪れるのではなく花目当てと思われるのではないかと想像して行かないのですと、訪れないことへの言い訳をした歌。

春来てぞ人もとひける山里は花こそ宿の主なりけれ

(拾遺集・雑春・一〇一五・公任)



とありし御返

20 こまうさのことにやはあらぬ山ざくらちりなばなに、つけむとすらん

【校異】 ○ことにやは—ことなには(谷)

【他文献】 なし

【現代語訳】 とあつた歌への返事

来たくないということではないのですか、そうなのでしょう。山桜が散ったら、来ないことを何にかこつけるおつもりなのでしょう。

【語釈】

○御返—道命から「やむごとなき」人への返事。

○こまうさ—「来まうさ」。来たくないこと。「まうさ」は、他に用例を見出せないが、形容詞の名詞形「憂し」と「憂さ」、「良し」と「良さ」の関係に同じく、助動詞「まほし」の反対語で、動詞の未然形についてその動作をするのに気が進まないことを表す「まうし」の名詞形だろう。↓五一、二四八

白河の関のせけばやこまうくてあまたの日をば引き渡りつる

(蜻蛉日記・上巻・兼家) ↑「来まうく」に「駒」を懸ける。

○ことにやはあらぬ—「やは…ぬ」は勧誘や希望を表すこともあるが、ここは反語。…ことではないのか、いや、その通りだろう、の意。なほざりにいぶきの山のさしも草さしも思はぬことにやはあらぬ

(古今六帖第六・さしもぐさ・三五八八)

○なに、つけむとすらん—「つく」は、関連させること。ことよせる。

花もみな散りなん後は我が宿に何につけてか人を待つべき

(後拾遺集・春上・一二七・具平親王)

【評】 邸宅の内外近くに美しい花盛りがあることは、その主にとって後拾遺集の具平親王の和歌に見るように、知人が花目当てでも来てくれたら嬉しいという場合と、拾遺集の公任の和歌のように、「花こそ宿の主」だと嫉妬して客から主への心寄せを疑う場合とがある。道命は前

『道命阿闍梨集』注釈

者と同じ気持ちに立って、訪れない相手が「やむごとなき」人であることもかまわず、菌に衣着せない恨んだ表現をしている。しかし、それはそのように遠慮なく言えるほどの親密な間柄であることを示している。「こまうさ」の参考歌として挙げた蜻蛉日記の兼家詠は、道命の祖母である日記作者による、

こまうげに成りまさりつつなつけぬを子なは絶えず頼み来にける  
への返歌。他に例のない語なので注意される。

21 うせにける人のほらからの、いみじうさいはひすぐれて、さ  
かえの、しるに、かのうせにし人のめのとがりやりし  
ん かくばかりさかりと花のさくなかにひとえだしもはまづちにけ

【校異】 ○かのうせにし人のめのとがりやりし—あきうせにしひとの

めのとこのやりたりし(谷)、○かくばかり—なくばかり(谷)

【他文献】 なし

【現代語訳】 亡くなった人の兄弟(姉妹)が、大変に幸せに恵まれて  
栄華を誇っているの、その亡くなった人の乳母の許に送っ  
た歌

これほどに今が満開の時だと花が咲いている中で、なぜ一枝だけが先に散ってしまったのでしょうか。御家族の御繁栄の中で、なぜお一人だけが先立たれてしまったのでしょうか。とても残念に存じます。

【語釈】

○ほらからの…さかえの、しる—亡くなった人が格別恵まれなかったのに反して、その兄弟が勢力を得て高位高官に上って栄華を極めて  
いること、あるいは、その姉妹が身分の高い貴族と結ばれて豪奢な  
結婚生活をしていること。

御さいはひのかく引きかへすぐれ給へりけるを、世人おどろき聞  
こゆ（源氏物語・少女）

例の世の中さかえののしる。十二月の二十日あまりに見えたり。

（蜻蛉日記・下巻）↑兼家が政界で重きをなしてきたこと。

○さかりと花のさく―「うせにける人のほらから」の比喩。

○ひとえだ―「うせにける人」の比喩。

○まづちりにけん―「けん」は過去の原因推量と解した。単に過去の  
推量ととれば、「まず最初に散ったようですね」となるが、それでは  
「ひと枝」で表された亡き人を悼む思いが浮かんて来ないだろう。

やよひのころほひ、人におくれてなげきける人にやりける  
花桜まだ盛りにて散りにけむなげきのもとを思ひこそやれ

（続詞花集・哀傷・三八九・成尋法師）

【評】同じ家族の成員であった者達なのに、長じるに従って生活状況に  
差が生じ、一方は高い身分に至り、あるいは豪奢な生活で世間に羽振  
りをきかせ、一方は寂しく世を去る。亡き人にしても、もとは同じ家  
に生まれたのだから、もつと華やかに続く一生もあってよいはずなの  
にと、その人の死を惜しみ悼む思いを詠んで、その人を慈しみ育てた  
乳母の悲しみを思いやった。

返し

22 さかりなる花のさかりも物ぞ思ふちりにしえだの、こりなく／＼

【校異】 ○返し―返カ本云（谷）

【他文献】 なし

【現代語訳】 返事

満開の花の絶頂のように栄光の時でも深く考えてしまします。花の散つ  
た枝が残らないように、亡くなった人が跡形ないという悲しみに泣き  
続けて。

【語釈】

○さかりなる花のさかり―亡き人の「はらから」が幸福の絶頂にいる  
ことを満開の花が咲き誇っていることに例えた。「さかり」を繰り返  
すのは稚拙。「花のさかり」↓一九、三二四

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

（古今集・春下・九七・読人不知）

○物ぞ思ふ―深く物思いに耽ること。花については、盛りの時でも散  
ることを予想して恐れる思いがある。

桜花風にし散らぬものならばおもふことなき春にぞあらまし

（天徳四年（九六〇）内裏歌合・六番左持・能宣・一二）

花により物をぞおもふ白露の置くにもいかならむとすらむ

（和漢朗詠集・前栽・三〇〇）

○ちりにしえだ―亡き人を例えた。↓一七四

大江匡衡みまかりてまたの年の春、花を見てよめる

去年の春ちりにし花も咲きにけりあはれ別れのかからましかば

（詞花集・雑下・四〇二・赤染衛門）

○のこりなく／＼―「なく／＼」は「無く」の強調に「泣く泣く」を  
掛ける。

忍び音にまた忍び音の重なりてひるまなくなく袖朽ちぬべし

（海人手古良集・五七）

とどまれと思ふといかで知りにけむ惜し気なくなく落つる涙を

（和泉式部集統集・一七）

【評】目前の「さかりなる花のさかり」である「はらから」と対照して、  
「ちりにし枝」である亡き人を惜しんだ。乳母の立場から我が子の死と  
同然の悲しみの深さを表した。初・二句が同語繰り返し返して稚拙なのは、  
悲しみの中にいて、「はらから」の栄光があまりに眩く見えたことから  
発せられたか。

子の日、まつのをにて、人くあまたぐしたりしに  
23 ひきつれてけふは子のひをしづかなまつのを山のねをたづねつ

【校異】 ○人く—人く—に(谷)、○くしたりしに—くたりしに

(書<sub>1</sub>)、○けふは子のひを—けふの子の日を(谷)

【他文献】 なし

【現代語訳】 子の日、松尾山に、人々を大勢連れて行つた時に詠ん

だ歌

人々を伴い連れ立って小松を引き、今日は子の日の行事をしたことよ。  
松の尾山の嶺で松の根を探しながら。

【語釈】

○子の日—正月、子の日に野辺の小松を根ごと引き抜いて、不老長寿を願う行事。

○まつのを—山城国の歌枕。現京都市西京区。桂川西岸にある松尾大社の裏山。祝賀の和歌に詠まれる。

ちはやぶる松のをやまの影見れば今日ぞ千年のはじめなりける

(後拾遺集・神祇・二一六八・兼澄)

○ひきつれて—ともに連れ立って、の意。小松を「引く」の意を掛ける。

引き連れて今日は子の日の松にまたいま千年をぞのべに出でつる

(後拾遺集・春上・二五・和泉式部)

○ねをたづねつ、—「ね」は「嶺」に「(松の) 根」を掛ける。小松の「根」を「尋ねる」とする用例は僅少。

こ紫たなびく雲をしるべにて位の山の峯をたづねん

(拾遺集・雑賀・一一七〇・清原元輔)

野辺までもなにかたづねむよろづよはこの深山なる松を引き見む  
(能宣集・二八四)

【評】 松尾は、道命の居た嵐山の法輪寺に間近い場所。生活圏の中の詠。

くらまにまうでたりしに、あつのおまであひて、よひとよ、  
おこなふこゑし侍し、つとめてやりし

24 名にたかきくらまの山をきてみればのりとめたるどころなりけり

【校異】 ○まであひて—まちあひて(谷)、○をこなふ—をこのふ(書<sub>1</sub>)、

○こゑし侍し—こゑも侍し(書<sub>2</sub>)、○名にたかき—をにたかき(書<sub>2</sub>)

(書<sub>2</sub>) 傍注なし(谷)、○山を—山に(書<sub>2</sub>)

【他文献】 なし

【現代語訳】 鞍馬山に参詣したところ、敦信が詣でているのにあつて、

一晚中、経を読む声がした、その翌朝に送った歌

有名な鞍馬山に来てみると、夜すがらあなたの読経の音が続いていたが、地名にある鞍のついた馬には乗るものだから、仏法—仏(のり)—を留めている所だったですね。

【語釈】

○くらまにまうでたりし—「くらま」は山城国の歌枕。京都市左京区鞍馬本町の鞍馬山。鞍馬寺がある。鞍馬寺は宝亀元年(七七〇)鑑

真門下の鑑禎が毘沙門天を安置し、延暦十五年(七九六)造東寺長

官藤原伊勢人が千手観音をまつたことに始まるとされる。山岳修

験の霊地でもあり、平安貴紳の尊崇を集めた。参道が枕草子に「鞍

馬のつづら折り」とあるのは有名。源氏物語「若紫」冒頭の舞台かともされる。参詣は、清正集・清少納言集・長能集・赤染衛門集などにも見える。↓四〇、二一四

墨染の鞍馬の山に入る人はたどるたどるも帰り来ななん

〔後撰集・恋四・八三二・中興女〕

くらまに詣で侍りける折に、道を踏みたがへて詠み侍りける  
おぼつかなくらまの山の道しらで霞の中にまどふ日かな

〔拾遺集・雜春・一〇一六・安法法師〕

○あつのお―藤原敦信か。生没年未詳。父は合茂。新猿樂記の著などがある明衡は息男。花山院主催の寛和二年（九八六）内裏歌合や藤原道長主催の長保五年（一〇〇三）左大臣家歌合などに出詠。本朝麗藻に詩一首あり。長和元年（一〇一二）敦良親王読書始に召された。肥後守・山城守に任じ、藤原頼通の侍読を務めた。道命との関係は花山院周辺での知己に因るか。

○おこなふ―行ふ。仏道修行すること。ここでは特に仏典等を読誦することとして用いている。

○名にたかき―高名の。有名な。道命は、この時点で鞍馬山に初めて訪れた口吻。

名にたかき錦の浦を来てみればかづかぬ海女はすくなかりけり

〔道命集・八三、後拾遺集・雜四・一〇七五〕

○のり―法。従い守るべき拠り所。特に仏の教えについて言う。鞍馬の縁語の「乗り」を響かせる。

〔屏風に、法師の舟に乗りて漕ぎ出でたる所〕

わたつ海は海士の舟こそありと聞けのり違へても漕ぎ出でたるかな  
な

〔拾遺集・雜下・五三〇・道綱母〕

鞍馬とぞのりを越えぬる山近く時雨るる空の名にこそありけれ

〔御形宣旨集・三〕

【評】鞍馬山で、予想外にも敦信の一晩中読経する声を聞いたことを、地名と関連付けて説明しようとした結果の機知が趣向の中心。「法どめたる」は敦信の読経への賛辞でもある。仏法を軽く諧謔的に詠んでいるところに道命らしさが感じられる。それは、遍昭の一面に近く、能因・行尊・西行に遠いと言えようか。

かへし

25 名にたかきくらまの山のこだかきはきみにひかれてたつにやはあらぬ

【校異】 ○こだかきは―傍注なし（書<sup>2</sup>、谷）、○たつ―くる（谷）

【他文献】 なし

【現代語訳】 返事

有名な鞍馬山が木高いように、私の読経の声音が高いのは、あなたのいらっしやることに引かれて声が大きく響くものではありませんか。

【語釈】

○くらまの山のこだかき―「こだかき」は「木高き」で、木立が高い。

鞍馬山の木高さと読経の声の高さの両方を言う。底本の傍注本文なら「高きね（峰―音）」の懸詞。「山」までが序詞。

音羽山こだかく鳴きて時鳥君が別れを惜しむべらなり

〔古今集・離別・三八四・貫之〕

○きみにひかれて―あなた（道命）の素晴らしさに感化されて。

千年まで限れる松も今日よりは君に引かれて万代や経む

〔拾遺集・春・二四・能宣〕

○やはあらぬ―反語。：ではありませんか、いやそうでしょう。↓二

【評】道命が『法華経』読誦に優れていたことはよく知られていて、その道命が同じ所にいるせいで、自分の読経が実力以上に聞こえたのだろうと謙遜した。

幼にして山に登りて、仏の道を修行し、法華経を受持す。はじめ心を一つにして他の心を交えずして法華を誦するに、一年に一卷を誦して、八年に一部を誦し畢る。就中にその音微妙にして、聞く人みな首をかたぶてかふとばずといふことなし。

〔今昔物語集・卷第十二・天王寺の別当道命阿闍梨の語 第三十六〕

当時鞍馬寺は真言宗の寺だったが、道命は天台宗の僧で、そうした宗

派の差は問題がないのか疑問が残る。似たこととして、やはり天台僧の淨藏が鞍馬に籠ったことが後撰集・大和物語に見える。

### 山寺に侍しころ

26 世をそむくところとかきくおく山は物思ふにぞいるべかりける

【校異】 ○ところときかくところとき、て〔書一〕・ところとき、て〔書二〕・ところとかきく〔谷〕、○思ふにそおもひにそ〔谷〕

【他文献】 新古今集・雑中・一六三九 詞書「山寺に侍りけるころ」

第二句「ところとかきく」第四句「物おもひにぞ」

【現代語訳】 山寺におりました頃に詠んだ歌

世俗を避けて住む所などと聞いて奥山に入ったが、奥山は物思ひをすることからこそ入るのが良いのだよ。

### 【語釈】

○山寺に侍しころ―道命の出家について、和歌大辞典・日本古典文学大辞典は、「幼にして叡山に登り天台座主慈恵大僧正の弟子となる」とするが、三保サト子氏は「道命法師伝考―飯室妙香院をめぐる―」（『源氏物語の内と外』風間書房 昭和六十二年十一月刊）において、大日本史料・寛仁四年七月四日の道命没時に挙げられた史料中の門葉記に永祚二年（九九〇）二月十四日の太政官牒として延暦寺妙香院の七禪師に「傳燈大法師位道命 年十七 膺三」とあることにより、永祚二年の三年前である永延元年（九八七）四月一六日以前一年以内の妙香院入室と推定され、それは前年寛和二年の花山天皇出家に従うものとされた。同記には続けて「得法印大和尚位尋禪 去正月廿六日奏状稱」とあり、道命は尋禪の入室の弟子とされる。尋禪はこの記事から三日後の二月十七日に入滅しており、一〇八はこの時の詠とされる。「山寺」は道命が供僧となった妙香院。また道命集中の「山寺」は、この妙香院か、後に阿闍梨となった摠持

寺かとされる。

○世をそむく―俗世を離れ、出家遁世する。

世をそむく苔の衣はただ一重かさねばうとしいぎ二人寝む

（後撰集・雑三・一一九六・遍昭）

○とかきく―底本文を、谷山本で修正した。

○おく山―和歌では、人跡まれで紅葉や雪なども人目と無縁な所とされ、入った人は寂しさに耐え難いと詠まれる。道命阿闍梨集に他に五首で詠まれている。↓一〇一、一〇八、一五五、二〇九、二一〇 行ひせんとて山にこもり侍りけるに、里の人につかはしける 人にだに知らせで入りし奥山に恋しさいかたづねきつらん

（拾遺集・恋四・九一四・読人不知）

飛ぶ鳥の声も聞こえぬ奥山に入りてぞものは思ひましける

（一条摂政御集・七五）

○物思ふにぞいるべかりける―「…にぞ…べかりける」は「…に…するのが良い」の意の定形表現。ここは、それによれば「物思うに入るのが良い」となるが意味が判然としない。『新古今集』では「物おもひにぞ」の本文で、「新古典大系」の脚注では「…まことは物思ひをしに入るべきところであつたよ。」と、「に」を目的を表すと解するが、「に」を原因と見て「物思ひのせいで入るべき所だったよ」との解釈も可能だろう。このどちらも「入る」を「奥山に入る」とする点では共通する。一方、「思ひ」に「火」を掛けて「深く思う」の意の「思ひに入る」という語がある。これに拠れば、「入る」と「奥山」は縁語で、「物思ひを深めるのが良い」と解される。しかし、底本文に従えば、「物おもふにぞ」と「入る」が結び付いた例は見付からないが、「…思ふにぞ…」の例を見ると「…思うことをもととして格別に…」の意で用いられているので、これによれば「物を思うことによつて格別に奥山に入ることが良い」となる。

うつつにぞとふべかりける夢とのみ迷ひしほどやはるけかりけん

（後撰集・恋二・六四一・醍醐天皇）

さもあらばあれ人は見ずとも花の木は風隠れにぞ植うべかりける

(源賢法眼集・八)

夏虫の思ひに入りてなぞもかく我が心から燃えむとはする

(伊勢集・一二九)

思ふにぞ悲しかりける我ならで今日をば誰か問ふべかりける

(赤染衛門集・四七四)

酔ひのうちの人の情けを思ふにぞ衣の玉もかけて知らるる

(為家集・一五九二)

【評】奥山に入つて現在の状況がどうか判然としない。他の用例から推測すると、世俗の諸縁を断ち切り、心を悩ませる事ない澄明な境地を求めて奥山に入つたが、実際にはそのようになることは出来ずに寂しさを耐えている状況で、一条摂政御集歌に同じ心境なのだろうが、そこに至つて、奥山とは物思いを存分に深めるべき所なのだと新たな境地を発見したと言うのか。

世を捨てて山に入る人山にてもなほ憂き時はいつち行くらむ

(古今集・雑下・九五六・躬恒)

やまでらにこもりて、人のもとにやり侍し

27 日にそへておほつかなさのまさるかなあひみえし日やとほ<sup>を</sup>ざるらん

【校異】 ○やり侍し—やり侍 (谷)

【他文献】 なし

【現代語訳】 山寺にこもつて、人の所に送りました歌  
日が経つにつれて会いたさがつのつてきますよ。あなたに会った日が遠ざかつて行くのだろうか。

【語釈】

○日にそへて—日が経つにつれて。日増しに。

日にそへて憂きことのみもまさるかな暮れてはやがて明けずもあらなん

(後拾遺集・恋四・八〇六・源高明、和泉式部集・五四六)

○おほつかなさのまさるかな—「おほつかなさ」は、待ち遠しく会いたい気持ち。

つげそめし思ひを空にかすめてもおほつかなさのなほまさるかな

(元良親王集・一二八)

冬より比叡の山に登りて、春までおとせぬ人のもとに

ながめやる山辺はいとど霞みつつおほつかなさのまさる春かな

(拾遺集・恋三・八一七・藤原清正女)

○あひみえし日やとほざるらん—平安和歌で「遠ざかる」を月日に用いることは少ない。

こぞ見てし秋の月夜は照らせどもあひ見し妹はいやとほざる

(古今六帖第四・かなしび・二四四四)

命だに心に叶ふ身なりせばとほざかりゆく日数へましや

(成尋阿闍梨母集・二二六)

【評】無技巧・無趣向の歌。会った日が遠ざかるにつれて募り増す恋しさが素直に表されている。道命歌の特色の一面が現れている。

かへし

28 あふことのいつとなきだにわびしきにむつれしほどのとほ<sup>を</sup>ざるらん

【校異】 なし

【他文献】 なし

【現代語訳】 返事

また会うことがいつと決まっていなことをすら悲しいのに、一緒に仲良くしていた時が遠くなってゆくようです。

【語釈】

○あふことのいつとなき―いつ会えるか決まっていな。道命歌の「あひみえし日やとほざるらん」をそのまま受ける。

あふことのいつとなきには七夕の別るるさへぞ羨まれける

(後拾遺集・恋一・六二九・隆資)

七夕に思ふものからあふ事のいつとも知らぬ我ぞわびしき

(貫之集・五七〇)

○むつれしほどのとほざるらん―「むつる」は、馴染み親しむの意。

第五句を二七に合わせた。

恋のごとわりなきものはなかりけりかつむつれつつかつぞ悲しき

(後撰集・恋一・五八三・読人不知)

我が背子とさ夜の寝衣かさね着てはだへを近みむつれてぞ寝る

(好忠集・九月をはり・二七二)

【評】二七への鸚鵡返しと言える内容だが、道命歌を踏まえつつ、下句で「あひみえしほど」を「むつれしほど」と変え、あなたが言うより深い間柄だったではありませんかと、二人の仲の親密さを強調して反論している点が趣向。単なる友人ではない恋人同士の雰囲気は漂う表現。あるいは、二六の語釈に示したように、妙香院入室という出家後間もない若年時に同室で親密に過ごした僧との贈答か。

人のきてかへるに

29 きのおわがうれしとおもふこゝろこそかへりてけふのあたにはありけれ

りけれ

【校異】 ○こゝろこそ―こゝろ□そ (谷)

【他文献】 なし

【現代語訳】 人が訪れてきて、帰る時に詠んだ歌

昨日、あなたの訪れで私が喜んだ気持ちはまさに、帰ってからは逆に、

『道命阿闍梨集』注釈

今日の憎む相手なのですね。

【語釈】

○きのふ…けふ…―「きのふ」の「うれし」という気持ちだが、「けふ」の「あた」だとする。昨日の喜びが、今日の辛さを強める結果になったと考え、喜んだことを「あた」と言った。

うれしかりし昨日の暮れの契りこそ今日はつらさの数に成りけれ

(永福門院百番自歌合・七十七番・左・一五三)

○かへりて―①「帰って」の意だが、②「却りて」で、かえって、反対に、の意を掛ける。

年頃あはぬ人にあひてのちにつかはしける

あひ見しを嬉しきことと思ひしはかへりてのちの嘆きなりけれ

(後拾遺集・恋四・七七二・道命)

○あた―仇。敵。第三句の「こゝろ」を擬人化して言った。

咲かざらば桜を人の折らましや桜のあたは桜なりけり

(後拾遺集・俳諧歌・一二〇〇・道濟)

【評】昨日は、人の訪れを、すぐに別れることなど忘れてただ単純に喜んだが、別れの悲しみの中で考えると、今日の悲しさは昨日喜び過ぎたせいだと思いついた。後先見ずに喜んだことを悔やむ気持ちから、喜んだ気持ちそのものを敵（かたき）だと詠んだ。前歌同様、恋人との別れの趣。

かへりて、又やりし

30 きのおをばものおもほえですぐしてき物おもほゆるけふいかにせん

ん

【校異】 ○おもほえて―おもへりて (谷)、○物おもほゆる―物おも

ほる (書二)

【他文献】 なし

【現代語訳】 人が帰って、又送った歌

昨日は、あなたに逢えて何の憂いも感ずることなく過しました。帰ったあなたのことがかりを思われる今日はどうしたらよいのでしょうか。

【語釈】

○きのふ…けふ―楽しかった昨日と、寂しい今日を対照させる。↓七八

わびつつも昨日ばかりはすぐしてき今日や我身のかぎりなるらん  
(拾遺集・恋一・六九四・読人不知)

昨日をば花の陰にて暮らしてき今日こそいにし春は惜しけれ  
(和泉式部統集・五三四)

○おもほゆ―自然に思われる。思われてならない。

逢ふことは玉の緒ばかりおもほえて辛き心の長く見ゆらむ

(伊勢物語・三〇段・六二)

【評】 昨日と今日の違いを「ものおもほゆ」一語の否定と肯定による対比で表した単純な歌。これも心で思っているありのままを、単純・無技巧で素直に表す道命の歌の一例と見られる。